

# 佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24) 3947

画家の家族

昭和二十六年 石本 秀雄

第七回日展で特選ならびに朝倉賞を受賞した作品である。タキ夫人と三人の娘を描いている。これより二年前の昭和二十四年に、納富進、久富邦夫らと研究団体「西虹会」を組織し、県洋画壇に生新な気分を吹き込んでいた時期の作で、この年の特選受賞は、まわりの画家たち



にとつて大きな刺激となつた。石本四十三歳であつた。またこの年に佐賀県展の実現を見た。これも石本の尽力によるものであつた。審査員に海老原喜之助、地元からは山口亮一を迎えた。なお佐賀大学に特設美術科が開設されたのは二年後の昭和二十八年であり、この時期、石本は県美術界の基盤づくりに奔走していたのである。

## 目 次

○画家の家族 .....	表紙
○石本秀雄展 .....	2~3 P
○資料紹介「元治元年八月 蓮池藩主鍋島直紀の参觀に關する資料について .....	4~5 P
○資料調査「樽作り」 .....	6~8 P
○行事のお知らせ .....	8 P

石本秀雄展	(昭和62年度 佐賀県立美術館企画展)
主 催	佐賀県教育委員会・佐賀県立美術館・佐賀美術協会・佐賀新聞社
会 期	昭和62年10月 2日(金)～10月23日(月曜日休館)
観 覧 料	大人500円(400円)／大・高生250円(150円)／中・小生150円(100円) ( )内は団体料金、団体は20名以上
展示概要	油彩画123点、スケッチ・色紙・掛幅等31点、絵付9点、愛用品

## 石本秀雄について

石本秀雄は昨年の3月、77歳で死去した。本展覧会は、戦後もとも本県の美術界の発展に力を尽した美術家である氏の業績を振り返り、その全画業を紹介するものである。

石本は、明治41年(1908)長崎県西彼杵郡福田村(現在の長崎市)に生まれた。絵は小さい頃から好きであったが、本格的に絵の勉強を始めたのは、美術学校受験準備のために入学した長崎東山学院中学においてであった。昭和3年(1928)東京美術学校图画師範科に入学した。この年、第15回二科展に特別陳列された佐伯祐三の滞欧期の作品に感動し、また帝展の出品を見て、特にその労働者群像に強く憧れた。この頃の遺作は少ないが、さいわい学生時代の「自画像」を見ることができる。この作品は、ちょうどレンブラントに憧れていたときのもので、その暗くて重い質感は、まさにレンブラント流とも言ってよいものがある。昭和5年、1930年協会展に出品する。これが展覧会への初出品である。

昭和6年(1931)東京美術学校を卒業、4月、佐賀県立小城中学校に赴任した。以後石本は生涯を佐賀の地で過ごすことになる。

昭和9年(1934)は石本にとって記念的な年であった。まず第2回東光展に出品、K氏奨励賞を受ける。さらに第15回帝展に「桜庭の春」を出品し初入選した。この作品は現在小城高校に所蔵されているものである。以来石本は、東光展、帝展(のちの日展)で活躍、東光展、日展の中心的な作家となってゆくのである。

またこの間、注目すべきこととして、石本は日展において、菊華賞、会員賞といったその年にはじめて制定された賞を受賞していることである。これは地方で美術活動する画家として特筆すべきことであろう。

つぎに、その業績において強調しなければならないことは、美術教育の側面においてである。この教育者としての面は、昭和27年以來その設置に努力し、また育成をつとめてきた佐賀大学の特設美術科がその舞台であった。またこれとともに、昭和26年(1951)に創設された佐賀県展の開催にさいしては、指導的な役割を果した。

こうした教育者としての面を充実させながらも、石本は他方、画家としての力量も充分に發揮した。

昭和37年(1962)日展審査員、翌年会員となるにしたがい、画歴上の最高実現を迎えることになる。作風もそれまでのいわゆる構成的な人物像から詩的な人物像へと変換する。しかしこれに成功すると同時に、石本は、昭和39年(1964)のヨーロッパ体験で知った、本来の風景画の造形性にしだいにひかれてゆくのであった。それがいっせいに開花しだすのが昭和45年(1970)頃からはじまる風景画への道と言える。ここに晩年執拗に描いた桜島との出会いがあった。もうひとつ風景、長崎港を中心とした作品はむしろ過去との出会いであつたろうか。ともかくも桜島シリーズは10年以上も続くことになる。しかし充分に芸術家として燃焼しきれないままにこの桜島との格闘を終えたと言わざるを得ない。

最後の作品は一転して郷土の海、有明海を描いた。

## 石本秀雄 略年譜

明治41	長崎県西彼杵郡福田村(現在の長崎市)に生まれる。
大正11	福田村尋常小学校から長崎三菱工業学校に入学。
大正15	長崎東山学院中学に編入学。
昭和3	東京美術学校图画師範科に入学。
昭和5	第5回1930年協会展に出品、入選する。
昭和6	第2回第一美術協会展に入選。
昭和9	東京美術学校を卒業。4月佐賀県立小城中学校教諭として赴任。
昭和11	第2回東光展に出品、受賞する。
昭和12	第15回帝展に「桜庭の春」が初入選。
昭和13	第1回大潮会展に出品。大潮会賞を受賞。
昭和18	新制佐賀大学発足し、教育学部の兼任教授となる。
昭和19	佐賀県立佐賀高等女学校に転勤。
昭和24	東光会員となる。
昭和25	佐賀師範学校教授となる。
昭和26	長崎県浦の崎に徒歩勤務中、8月召集され佐世保海兵团に入団。
昭和28	新制佐賀大学発足し、教育学部の兼任教授となる。
昭和33	佐賀大学専任教授となる。
昭和35	第7回日展に「画家の家族」を出品、特選となる。
昭和37	佐賀県展の創設に尽力。
昭和38	佐賀大学教育学部に特設美術科開設される。
昭和39	緑光会(東光会佐賀支部会)を結成。
昭和40	第3回日展出品の「対話」が菊華賞を受賞。
昭和44	4月佐賀県文化会議が創設され、初代会長に就任。
昭和46	日展審査員となる。
昭和49	10月渡欧。
昭和53	冬、久富邦夫と鹿児島にスケッチ旅行し、桜島の壮大さに感動。
昭和55	長崎を主題とした連作はじまる。
昭和56	佐賀大学を退官。佐賀県立博物館にて「石本秀雄展」開催。
昭和58	「花咲く桜岩帯」で日展会員賞。
昭和59	文化功労者の表彰を受ける。
昭和61	文化功労者の表彰を受ける。
昭和62	長崎県立美術博物館で自選展を開催。
昭和63	黙三等旭日中綬章受章。
昭和65	県政百年記念功劳賞受賞。
昭和66	日展参与となる。
昭和67	3月9日、佐賀市にて逝去。



雨の日（昭和15年）



チェロを弾く（昭和37年）



焚火（昭和16年）



新緑オランダ坂の家（昭和51年）



首飾りの裸婦（昭和33年）



花咲く熔岩帯（昭和53年）



対話（昭和35年）



干涸の有明海（昭和60年）

## 資料紹介

元治元年八月 蓬池藩主鍋島直紀の参觀に関する資料に  
(1864) ついて

昭和62年6月 佐賀市蓮池町の杠敬代さん名儀の資料10点を杠文吉氏の御厚意で御寄贈いただいた。内容は蓮池藩主の朝廷への参觀に関する資料であり、当時の大名の京都参觀の実態を知るうえで貴重である。

鍋島直紀(1826~1891)は弘化2年(1845)8月、父直與のあとをうけて佐賀藩の支藩・蓮池藩主となった。血縁的にも鍋島直正(閑叟)の従弟にあたる。元治元年八月のこの時期は政治的に激動の時代であった。朝幕間の動きは文久2年(1862)以降島津久光を中心とする公武合体派の勢力が大きかったが、朝廷内部にはこの公武合体派に対して攘夷親征を主張する尊攘派が長州藩と結んで勢力を伸ばし幕府に攘夷実行を迫っていた。

文久3年(1863)8月18日の政変により三条実美らの尊攘派は朝廷内部から一掃された。翌元治元年まき返しきをはかった尊攘派の動きに対して6月、池田屋事件が起き7月についに禁門の変が起き、その後、長州藩追討の勅令が出て、7月24日に幕府は佐賀藩を含めて西国21藩に出兵を命じている。8月5日には英・米・仏・蘭の4国連合艦隊による下関砲台占拠事件も起きて内外ともに緊張が高まっている。

このような状況の中で、鍋島直紀の朝覲問題は起きるのである。もともと蓮池藩(52,625石)は寛永16年(1639)に成立し、小城・鹿島と並んで佐賀藩の三支藩の一つとして大名として遇され、江戸への参勤も行っており、勅使饗応などの御馳走役を幕府に課されていた。また、鍋島直紀がどうして朝覲するのかという点については、幕府は公武合体路線を維持する立場から、江戸への参勤交代の制度を緩和して大名の妻の帰国を認めたり、文久3年には朝廷の意向をとり入れて、江戸へ参勤する大名には途中で京都へ参朝(朝覲)させることとした。

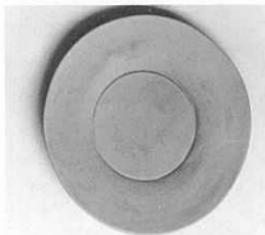
しかし、激動する政治情勢の中では、その対応については慎重にならざるを得ない。とりわけ、佐賀藩全体の舵取り役である、前佐賀藩主(文久3年、直大に譲る)鍋島直正(閑叟)は局外中立の立場を守ろうとしていた。直正は元治元年4月、幕府からの宰相推任の辞退を申出しており、いっぽう、朝廷からの上京依頼を病氣を理由に断っている。元治元年3月に鍋島直紀の京都参朝について、佐賀本藩より幕府に意向を尋ねているが、幕府からは予定通りに京都に参朝して9月中に江戸へ参勤することを命じている。將軍家茂自身が京都の二条城へはいり孝明天皇に朝覲して「汝(将軍)は朕が赤子、朕汝を愛すること子の如し」という書簡などを受取っている。また庶政を幕府に委任する旨の沙汰書も出されている。幕府の独裁体制はすでに失われ、朝廷と相談しなければ内

政・外交ともに決断できない状況にあった。

元治元年7月2日、鍋島直紀は蓮池を出発して参觀の途についた。ただし、尊攘派が指導権をもつ長州藩の動きが、とくに池田屋事件以後活発になっており、これを危懼して長州藩領の下関をさけて豊後の佐賀閥から三隻の舟で出航することにした。蓮池から陸路、南関・山鹿・大津内ノ牧・野津原を経由し、7月7日に佐賀閥に着いている。なお、この間、鍋島直正は京都の情勢をみて直紀の朝覲を中止することを助言し、佐賀閥で病氣を理由に滞船して情勢をみることをすすめた。長州藩の諸隊が上京している情報を知っての措置と考えられる。しかし、鍋島直紀は直正の意向には反対で、供の侍の数も多くしているので大坂まで行って情勢を探りたいと主張して佐賀の直正との間に佐賀閥から何度も使を送っている。その間、7月19日、京都に於ては禁門の変が起り、この情報が佐賀閥にもたらされた。結局、直紀は8月にはいつて佐賀閥を出航し、同16日大坂に着き、19日伏見着<sup>20</sup>、20日京都の妙心寺に宿営、21日二条閻白邸で閑叟二条斉敏に参朝の次々を依頼し、8月23日、禁裏小御所で孝明天皇に拜謁した。その後、二条閻白邸などへ御礼に行っていいる。禁門の変で京都では28,000余戸が焼失し、長州征討が決定するなどあわただしい動きの中での朝覲であり、対外的に四か国艦隊の下関砲撃事件もあった。

以上のいきさつで参觀した蓮池藩主鍋島直紀39歳が押領した天盃など一連の資料であるが、朝覲の経験のない大名達にとって、まさに朝覲作法の便利なマニュアルが揃えられている。なお、鍋島甲斐守直紀は出発時は朝覲を終えて江戸へ参勤の予定であったが、長州征討の準備や父鍋島直與の病を理由に江戸参勤を免ぜられて、9月30日、京都を出発し、10月21日、蓮池に着いている。なお、押領の天盃は護衛隊に守られて運ばれた。

### 資料1 天盃



径 8.0cm 高さ 1.2cm 瓦器

いわゆる、かわらけである。押領した天盃は店舗に納められ供をつけて運ばれた。

### 資料2 参内手続

21.0×130.0 包紙あり



参内についての順序が記載してあるもので、内容は  
参内之儀

- 一、鍋島甲斐守參内鶴間着座  
一、傳奏出會 甲斐守自分口上申述べられ 傳奏退入  
言上之後 更出席告げ 御対面有るべき之由  
一、出御之後 傳奏鶴間出席誘引 小御所取合廊下北方  
着座  
一、甲斐守自分御禮貫首申次 御太刀折紙持參置 下段  
廊に於て 龍顔を拝さる  
一、甲斐守下段に於て天蓋頂戴  
一、鶴間に於て御礼申述べ退出  
なお、包紙には、參内手続 甲斐守從五位下藤原直紀  
干時年 三十九歳

### 資料 3 束帶着方次第

18.5×49.0

束帶を着ける順序を簡略に述べたものである。

#### 資料4 參內行列簿



8.0×19.0 書冊

参内のための行列図である。参内する行列に従う人数は109人に及んでおり、天盃を受取つての天盃行列は57人、献上品を運ぶ行列が41人、合せて207人という大行列である。包紙には、元治元年甲子八月廿三日巳刻参内行列簿がある。

### 資料5 参内下乘其外図

54.0×37.0 折本装 四面

参内し駕籠を降りた所から控の間である諸大夫の間の

中の鶴ノ間までの案内図である。巡路は朱線で示してあり、鶴ノ間から廊下を通って小御所への巡路も示してある。

### 資料6 御対顔作法絵図

50.0×40.0 折本装 図面

小御所の平面図が画かれ、太刀を献上し、天盃を受取る位置が示されている。当日は鍋島直紀を含めて3人の大名が天盃を受けている。なお、玉座（天皇が位置する場所）と太刀を献上し、天盃を受取る場所は約6間半（約12m）ほどもへだたっている。公卿や殿上人の位置、傳奉役や申次役の位置も示されている。

### 資料7 掛領物目録 4通

鍋島直紀は参觀にあたり、閑白二条斎敬に取次を依頼している。二条斎敬は八月十八日の政変で中川宮・近衛忠熙らとともに三条実美などの尊攘派の追放に成功した公武合体派のリーダーの一人で、閑白となって孝明天皇を補佐していた、当時の実力者の一人である。鍋島直紀は八月二十一日、「二条斎敬邸を訪問して」いるが、この訪問



問に対して二条斎敬から銅駄こと、直紀に対して返礼の品が送られた。目録によれば、包紙には、甲子仲秋二十一日調、千銅駄殿閑白殿賜之、として内容は、末廣と夏扇を収めたもの一箱と狩衣一領が与えられている。

さらに、參朝後、二十八日に御礼に伺ったときにも返礼として銅駄（直紀）あてに、季秋二十八日再謁、干銅駄殿賜之、として、目録の内容は、閑白殿より甲斐守江と表記してある包紙と内容は、閑白殿より甲斐守様へとして、御筆物一箱、御硯箱一箱、御文台一箱とあり、別に庶君御方よりとして、御菓子一箱がある。また同時に鷦翁（直紀父 鍋島直與）あてに末広と夏扇の詰合せの一箱を受領している。なお、この際の閑白家への献上品は不明である。

(学芸課長 小宮睦之)

## 資料調査

樽作り — 佐賀郡久保田町徳万 —

### 桶と樽その違いと歴史

樽は、細長く小割りした板を円筒形に並べて底板を入れ、蓋でしめつけ、蓋をはめこんだ木製の容器である。桶と樽の違いを原田製樽所の御主人、原田參次氏はこう語られる。「蓋がなくて足があるのが桶で、蓋があって足がないのが樽である。」と。この表面的な違いは、そのまま両者の用途の違いを示している。つまり、桶は主として貯蔵用の容器であり、樽は運搬用の容器であるということである。このことは、桶の多くは平行円筒であるのに対し、樽は中の液体の揺れを最小限にくい止め、また強度を増すために底や蓋の部分よりも樽の中央部をふくらませてあるという構造上の違いにも現われている。また貯蔵用と運搬用という違いを概念的にとらえると、それは半永久的なものと一過性のものとに分類できそうである。もっともこの違いは桶と樽の製作技術の違いとして現われており、まずは桶や樽の側板であるガワイヤの整形の際にみられる。桶の場合、ガワイヤの接合面の角度を木製の定規によって正確に計測するが、樽の場合そういった精密さを必要としない。もう1つは、ガワイヤを円筒形に組み合わせる際に、桶は竹釘を打ちこんで接合していくのに対し、樽は蓋で固定するのみである。

このように、両者に違いがみられるものの、やはり共通して必要なことは、中に入れる液体が漏れないようにつくられなければならないことである。桶は、台鉢<sup>(1)</sup>の普及に伴い鎌倉末期から室町期にかけて発生したと考えられている<sup>(2)</sup>。つまりガワイヤの1本1本を隙間なく接合して、液体漏れない容器をつくるには、ガワイヤの接合面を削る台鉢の存在なくしては考えられないことを意味している。ここで推測できることは、樽もガワイヤの接合面の整形に台鉢の一種である正面を必要とするところから、その発生時期が桶とほぼ同じ頃であろうということである。しかし、室町時代の作とされる『風俗図屏風』・『三十二番職人歌合』・『七十一番職人歌合』などには、曲げものや桶は出てくるが、樽は出てこないところから、発生順序としては、桶の後に樽が発生しただろうことが推測できる。石井謙治著『図説和船史話』によれば、桶・樽技術の本場である関西において、酒荷専用の廻船である樽廻船の登場は享保15年(1730)である。多い時は、年間100万樽もの酒を輸送したというから、この時点での樽製作技術はかなり進歩していたと考えられる。

### 原田製樽所

今回、樽の製作について聞きとりにうかがった原田參次氏は、大正12年生まれの64歳、佐賀郡久保田町徳万に店をかまえる原田製樽所の2代目である。初代は明治18

	特級	1級	2級
1斗	22.0 ~27.5	20.0 ~25.0	18.0 ~22.5
2斗	30.8	28.0	25.2
4斗	35.2	32.0	28.8

(単位 千円) (表 1)

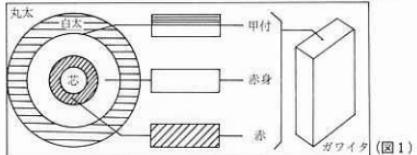
年生まれの父、与吉氏で大正元年の創業である。

參次氏は、昭和18年に軍隊としての召集を受け終戦年の20年9月までその任務につく。その後、いたん佐賀に帰り、2年間は福岡でサラリーマンとして働くが、兄2人を戦争で亡くされたこともあって、昭和23年より三男である參次氏が家業である製樽所を繼ぐことになる。この頃は、クラゲ樽(1斗樽)・アミツケ樽(1斗樽)・ウミタケ樽(4斗樽)・エビ樽(2斗樽)・セッカ樽(1斗樽)といった海産物用の樽が中心に出回り、漁業組合や仲買人を通して販売していたと聞くが、これも昭和30年頃までのことで、その後34・35年頃からは合成樹脂の容器が出回り始め木製樽の生産はしだいに減少の一途をたどることになる。しかし、昭和48年のオイルショックにより再び木製樽の生産は息を吹き返し、さらに建築ブームによる祝樽の生産増加もみられる。現在、酒造業との関係で祝酒用の樽の注文が多いという。以下、酒樽の製作について述べていこう。

### 製作工程と用具

#### 1 材料(各部材の製作)

樽は、ガワイヤ・底板・蓋、および蓋の各部材がうまく組み合わされて型づくりされている。ガワイヤには吉野杉の丸太材が用いられ、芯と白太(表皮に近い部分)を除いた部分から板目<sup>(3)</sup>に製材される。この時、1枚のガワイヤには最低3本の年輪が必要である。以前は、肥後杉を使用したことでもあったというが、いずれにせよ液体や塩気に強く、細工がしやすいという杉材の特性を見抜いた上で素材選びであることは間違いない。樽の価格はこのガワイヤが丸太のどの部分から取られたものである



(图1)

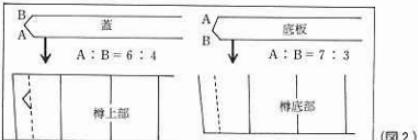
かによって違ってくる。特級の樽は「甲付」、上(1級)は「赤身」、並(2級)は「赤」のそれぞれの部分からガワイヤとして取られており(图1)、価格との関係は【表1】の通りである。また樽の容積(または外径)によってガワイヤの高さ、厚み、および分量に違いがあり、しかも1丸<sup>(4)</sup>から製作できる樽の数も異なってくる。1斗樽、2斗樽、4斗樽とそれぞれの関係は【表2】の通りである。

底板と蓋の材料には県内産の杉が用いられる。底板と蓋は共に板目に製材された板を利用する点は共通するが、底板には丸太の「赤身」の部分、蓋には「白太」の部分

径(外径)	ガワイヤの高さ	ガワイヤの厚み	1丸分のガワイヤを1丸かられたての時(初期段階)	1丸の数
1斗 1尺1寸	1尺1寸	4.5分	40尺	10丁
2斗 1尺5寸	1尺5寸	5.5分	35尺	7丁
4斗 1尺8寸	1尺8寸	6.0分	32尺	5丁

(表 2)

がそれぞれ使用される点は異なる(図1参照)。さらに、底板は3枚板もしくは5枚板のいずれかからなり、蓋は必ず5枚板からなるという違いも見られるが、奇数枚の板を組み合わせ中心に板の継ぎ目がこないようにする点は共通する。この時、継ぎ合わせの方法としてマダケ製の竹釘が各板の接合面に打ち込まれるが、接着剤はいっさい使用されない。このようにして接合された板は底部、



蓋部のそれぞれの直径に応じて円形に切り落とされる。その後ガワイヤとの接合面になる部分を山形に切り込み、ガワイヤへの食い込みを強くする。この時、底板、蓋はそれぞれ樽の内側(A)と外側(B)になる面で切り込みの割合が異なり、蓋側部の切り込みは蓋を入れこむ溝の切り込みよりも鋭角で大きめになる(図2)。

箆にはマダケの青竹が使用され、樽の大きさにより使用する箆の数は違ってくる。また、樽の大きさおよびどの部分に箆を入れこむかにより使用する丸竹の規格は違い(表3)さらに「何回捻りの何回巻き」の竹籠を用いるのかが異なってくる。たとえば2斗樽を例にすると、口輪、口二および三番、二番、シリ輪には4回捻りの4回巻きのものを、胴輪、小中には3回捻りの5回巻きの竹籠を用いるのである。各箆の名称は上部から口輪・口二(重ね)・胴輪・小中・三番・二番・シリ輪(泣き輪)と呼ばれる(但し1斗樽については小中はない)(図3)。また竹籠は箆材を同一方向に捻って輪にする捻籠と、捻る方向を左右交互に変えて輪にする組籠の2種類がある。4斗樽までの製作には専ら捻籠を用いるが、径の大きい樽になると1本の箆材では巻ききれない場合があり、この場合には数本の箆材を継ぎ合わせ組籠の形式をとる。

## 2樽の製作とその用具

樽作りの生産量が増加すると仕事は分業化されていった。ガワイヤを製作する「木割り職人」、箆用の竹を製作する「竹割り職人」、底板や蓋を製作する「底・蓋屋」、樽に組み立てる「樽職人」である。現在、「竹割り職人」<sup>[6]</sup>、「底・蓋屋」・「樽職人」に相当する仕事は原田製樽所において行われている。ただ「木割り職人」に相当する仕事のみは昔から佐賀には存在しなかつたらしく、その理由として、ガワイヤに適した杉材が県内では手にはいら

なかつたことがあげられる<sup>[7]</sup>。現在ガワイヤは奈良県吉野から取り寄せられてはいるが、樽材に適した杉材の選択は、次次氏自ら吉野へおもむいて行われている。ここに職人としての素材に対する強いこだわりと樽作りに於ける素材そのものの重要性がうかがえる。

「木割り職人」・「竹割り職人」・「底・蓋屋」により出そろった各部の素材は「樽職人」の手によって樽に完成するが、樽職人による、いわゆる製作全工程の完結は秋の乾燥期を待たねばならない。梅雨期を中心に湿度の高い時期に樽を完成させると秋の乾燥期にはくるいが生じるからである。したがって9月から翌年の桜時分(4月頃)までを樽製作の最終工程にあており、5月以降8月までをその準備期間とし、作業はガワイヤを竹籠で仮締めにし、底板だけを入れこんだ状態で止めておき、秋の乾燥期まで倉庫に保管される。以下、「樽職人」による2斗樽製作の工程を説明する。

### ①ガワイヤの整形

ミセイタの上でムネアテでガワイヤを保持しながら、樽の外面になる部分に外銚(カワケズリ)をかける。同様に樽の内面になる部分に内銚(カワケズリ)をかけガワイヤの厚みを調整し、丸みをつける。この段階で、ガワイヤの上下四端を適当な角度に削り、円筒形に並べ籠で締めつけた際に中央部に多少のふくらみが生じるようにする。次に正面でガワイヤの接合面を削り、継ぎ目の角度を調整する。これらガワイヤの整形作業は特に長年の経験と「手ごころ」によるところが大きく、まさに「職人技」たるところである。

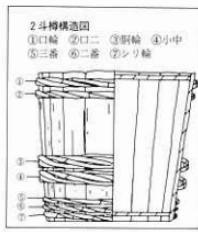
### ②各部材の組立て

樽の円周に必要なガワイヤの準備が済むと、口仮輪(竹製)・胴仮輪(竹製)・シリ仮輪(鉄製)の各仮輪を用いて円筒形に組み合わせる。この時ガワイヤの上・下を水にひたしやわらかくして作業のしやすいようにする。次に胴仮輪を除いた状態で樽の底側部にあたる内面をツッコクリという内削り用の鉋で「底ぐり」をする。これが終わると木槌と締め木を使って口輪・胴輪・小中の順序で籠を入れこんでいき、口仮輪をはずし、立棒を使って木口からの深さを計りながら底板を上部から入れこんでいく。次に三番の籠を木槌と締め木を使って入れこみ、さらに締めつけ、シリ仮輪をはずす。この時点ですべて

の仮輪はとりはずされ、青竹の籠のみとなる。次に、木口ぎり銚で木口の内側の面取りを行い、ツッコクリで蓋側部にあたるガワイヤの内面を削る。この段階で「クチキリ」という工程にはいり、アイキリを使って蓋をはじめこむ溝をV字形にほり

	口輪・口二	胴輪・小中	三番・二番	使用する竹籠の数
1斗	4寸竹	6寸竹 (但し小中は不用)	4寸竹	6本
2斗	5寸竹	6寸竹	4寸竹	7本
4斗	6寸竹	7寸竹	5寸竹	7本

(表3)



(図3)

こみ、木槌を使って蓋を入れこむ。この時点で、円筒形に並べられたガワイタは底板と蓋がはめこまれ、4種の縦で締めつけられた状態になり、樽の原形が出来上がったことになる。次に「胴かき」という工程にはいる。これは円筒形に組まれたガワイタの縫目を段差をなくす作業で、メチガイトイという銛状の刃物を使って樽の胴部（口輪と胴輪の間）を削る。この後、口二・二番の順序で、木槌と締め木を使って各箇所を入れこみ、次に「ケツバライ」という工程で樽の底の木口面を取り出す。内側を内鍛で、外側をシリバライという銛状の刃物を使っておのの面取りを行うのである。次にカネベラと木槌を使ってシリ輪（泣き輪）を入れこむ。「泣き輪」という名称のごとく、この工程は箇の中で最も熱のはいるところでもある。この時点ですべての部材は組み立てが終了し、樽本体は完成したことになる。後は仕上げ作業へとはいっていく。

### ③仕上げ

まず「胴上げ」を行う。これは、すでに入れこんであ



①ガワイタに内鍛をかける



②ガワイタを直正にかける



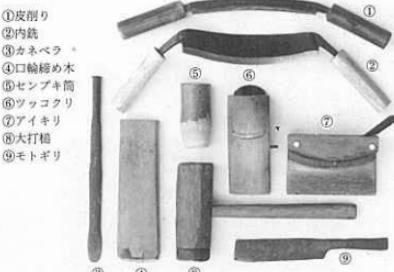
③ガワイタを円筒形に組み合わせる



④竹籠を入れこむ

る胴輪を木槌とドゥアゲを使って上部へ引き上げる作業である。これが終わるといわゆる籠の表面的な部分の仕上げ作業へとはいる。「元打ち」という工程ではモトギリを使って捻籠の余分な部分（籠材の先端部分）を切り落とし、さらに「輪こぞぎ」という工程では茶せん（輪磨き）と呼ばれる竹製の道具を使って、竹籠のさくれ立った部分をこすり落とす作業を行なう。次に「あら吹き」という工程にはいる。これはセンブキ筒という竹製の筒を、蓋にあけられた栓の穴に差し入れ、息を吹きこんで液体漏れの検査をするもので、この後さらにエーコンプレッサーによる厳重な検査が行われる。このようにして「仕上げ検査」が終わると、小中と三番の間に呑口があけられる。これにはハンドル式のノミグチアケが用いられ、直径8分の穴があけられる。この呑口の直径は樽の大きさによって違いがあり、1斗樽で6分、2斗樽、4斗樽は共に8分の呑口である。最後にメクラ（ウメゼン）をこの呑口に差しこんで樽作りの全工程は終了する。

(芸芸員 山崎和文)



註1 村松首次郎「大工具の歴史」によると台鉋が登場するのは15世紀頃と考えられている。

2. 柳宗理、渡谷貞、内堀繁生編集「木竹工芸の事典」朝倉書店

3. 枝自とはガワイタの内鍛部（接合部）でない面をさす。したがって接合面は極目であり、ガワイタどおりの接合時には木目と木目の間のやわらかい部分は圧縮され凹面を呈しうまくかみ合うのである。

4. ガワイタの束の單位は「丸」で表わす。

5. 樽の円周1周に於いて筋材を何回捻り、それを何周巻くのかが、樽の大きさおよび籠を入れる場所によって違う。

6. 原田製樽所に於けるこの仕事のみは、作業スペースの関係上、多摩市東久町に別に工場を持つ。

7. 朝日新聞社編「木の道具」によれば、酒造業で著名な界、西宮、灘の各方面へ桶・樽材を送っていたのは、奈良県吉野の林業地帯であり、桶・樽材用の杉を育てるために密植という方法をとった記述されている。つまり、大量需要があったからこそ、桶・樽材に適した杉の育成法がとられ供給に適なものと考えられる。こういった強力な需要と供給の関係のない佐賀県に於いて、ガワイタに適した杉材が手にはいらなかったのは当然といえる。

## 行事のお知らせ（昭和62年度）

企画展（なお第3期常設展は、11月27日から3月31日まで開催いたします。）

展覧会名	会期	会場	内容
第37回佐賀県美術展	10月31日～11月8日	美術館 博物館	日本画・洋画・彫塑・工芸・書・写真・デザイン入選作約450点
第11回佐賀県高等学校芸術祭美術・書道展	11月15日～11月23日	美術館 博物館	県内高校生の絵画・書など約300点
第38回佐賀県学童美術展	11月25日～11月29日	美術館	県内小中学生の絵画・デザイン・クロッキーなど約600点

博物館・美術館報 第78号

発行年月日 昭和62年10月1日

編集 大塚正道

発行 佐賀市城内1丁目15番23号

佐賀県立博物館

佐賀県立美術館

印 刷 同大印刷